

國學院大學學術情報リポジトリ「K-RAIN」

中古和歌における話し手の意志をめぐる疑問文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): 和歌, 話し手の意志, 疑問文, 「む」, 「まし」 キーワード (En): 作成者: 藤原, 慧悟, Fujiwara, Keigo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000564

中古和歌における話し手の 意志をめぐる疑問文

藤原慧悟

1 本稿の目的

中古語における話し手の意志をめぐる疑問文の文末には、「む」あるいは「まし」が用いられる。(1)～(3)は文末に「む」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文、(4)～(6)は文末に「まし」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文である。

- (1) 年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ
(古今和歌集1)
- (2) いづくにか身をば棄てむと白雲のかからぬ山もなくぞ行く
(源氏物語・浮舟、⑥192)
- (3) いかにせむ小倉の山のほととぎすおほつかなしと音をのみぞ泣く
(後撰和歌集196)
- (4) 秋の野に道も迷ひぬ松虫の声する方に宿やからまし (古今和歌集201)
- (5) 雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし
(古今和歌集337)
- (6) ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の荻ぞ答ふる
(大和物語、376)

しかし、話し手の意志をめぐる疑問文に「む」が用いられた場合と「まし」が用いられた場合との間にどのような意味の違いがあるかは、十分に明らかになっていないとは言えない。中古散文における話し手の意志をめぐる疑問文の様相については藤原慧悟(2022)で述べたが、(1)～(6)のような和歌の用例を考察の対象としなかった。和歌には散文に見られない表現も存するため、本稿では中古和歌を対象に調査と考察を行ない、話し手の意志をめぐる疑問文に「む」が用いられた場合と「まし」が用いられた場合との違いを明らかにする。

2 散文における話し手の意志をめぐる疑問文

まず、藤原慧悟 (2022) (以下、前稿) の調査・考察に基づいて、散文における話し手の意志をめぐる疑問文の様相を確認する。前稿では、行為の実行が決定しているか否かという点に注目して話し手の意志をめぐる疑問文を分析し、行為の実行が決定していれば「む」が、行為の実行が未決定であれば「まし」が用いられることを明らかにした。どんな内容を問題にしているか、行為の実行が決定しているか否かによって文型を整理すると、表 1 のようになる。

表 1 中古散文における話し手の意志をめぐる疑問文

	行為の実行が決定している	行為の実行が未決定
ある行為を実行するか否か		～や～まし いかにせまし
ある行為をどのように実行するか	不定語～む	不定語～まし
どんな行為を実行するか	いかにせむ	

「む」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文は、何らかの行為の実行が決定していることを表す。「む」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文のうち、「不定語～む」は、実行が決定している行為をどのように実行するか迷っていることを表す。

(7) (頭中将→式部丞)「式部がとほころにぞ、気色あることはあらむ。すこしづつ語り申せ」と責めらる。「下が下の中には、なでふことか聞こしめしどころはべらむ」と言へど、頭の君、まめやかに、「おそし」と責めたまへば、何事をとり申さむと思ひめぐらすに、(式部丞)「まだ文章の生にはべりし時、……」と申せば、(源氏物語・帚木、①85)

(8) かへるに、(伯母→孝標女)「何をかたてまつらむ。まめまめしき物はまさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。(更級日記、298)

(7)は、式部丞が頭中将に話をしると催促される場面である。何を話すかは決まっていなくても、式部丞は中将からの催促によって何らかの話をする必要に迫られているため、「とり申す」という行為の実行はすでに決定している。(8)は、孝標女に伯母が贈り物をする場面である。伯母は何かを贈ることを前提に発話している、やはり「たてまつる」という行為の実行はすでに決定している。実際に、(7)も(8)も続く文脈で問題になっている行為を実行している。

また、「いかにせむ」は、何らかの行為の実行を前提に、どんな行為を実行するか迷っていることを表す。

- (9) (少将)「車取りにやれ。やをらふと出でなむ」とのたまふほどに、石山の人(=中納言)ののしりておはしぬ。(少将)「不用なめり」とて、出でたまはずなりぬ。女、かく隠れもなき所に、人もこそ来れ。いかにせむと、胸つぶれて、いとおそろし。
(落窪物語、68)
- (10) (北ノ方ノ)いとおいらかにつれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、(鬘黒大将ハ)いかにせむと思ひ乱れつつ、格子などもさながら、端近ううちながめてゐたまへり。
(源氏物語・真木柱、③363)

(9)は、石山詣から帰ってきた中納言家の者たちに少将が見つかることを危惧する落窪姫君の当惑を表している。(10)は、平然とした北の方の態度に対する鬘黒大将の当惑を表している。(9)も(10)も、具体的にどんな行為かは決まっていないうが、望まぬ状況や対処に困る状況から脱するために、何らかの行為を実行することが前提になっている。以上のように、「む」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文は、何らかの行為の実行が決まっていることが特徴である。

一方、「まし」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文は、行為の実行が未決定であることを表す。まず、「～や～まし」である。「～や～まし」は、ある行為を実行するか否かが迷っていることを表す。

- (11) またよからぬ人々文おこせ、またみづからもたちさまよふにつけても、よしなきことの出で来るに、(帥宮邸ニ)参りやしなましと思へど、なほつつましうてすがすがしうも思ひ立たず。
(和泉式部日記、64)
- (12) (末摘花ニ)も^ものや言ひ寄らましと(源氏ハ)思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。
(源氏物語・末摘花、①269)

(11)は帥宮邸に出仕することを実行するか否か、(12)は末摘花に声を掛けて近寄ることを実行するか否かが問題になっている。当然、話し手にとって行為の実行は未決定である。

次に、「不定語～まし」である。「不定語～まし」は、ある行為をどのように実行するか迷っていることを表すが、その行為の実行が未決定である点で(7)(8)のような「不定語～む」とは異なる。

- (13) (あこぎ)三尺の御几帳一つぞいるべかめる。いかがせむ。誰に借らまし。
(落窪物語、50)
- (14) 宮の御前に、内の大臣の(紙ヲ)奉りたまへりけるを、(定子)「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、「さは得てよ」とて給はせたりしを、
(枕草子、467)

(13)は、几帳を手に入れる方法についてあこぎが考えを巡らす場面である。几帳は手に入れなければならないため、何らかの行為の実行を前提とする「いかが

せむ」が直前にあり、実行する行為の一案として「もし誰かに借りるとしたら、誰に借りようか」と表現したものである。後の場面では実際に几帳を借りるが、この段階での「借り」は仮定的な行為に過ぎず、その実行は未決定である。(14)は、伊周から紙を与えられた定子の発話である。定子にとって「何かを書く」という行為は必要に迫られたものでなく、何も書かないことも十分にあり得る。実際に、後に定子は清少納言に紙を与えていて、自身は結局何も書いていない。「もし何かを書くとしたら、何を書こうか」という表現であり、「書く」という行為の実行は未決定である。

最後に、「いかにせまし」について。「いかにせまし」はある行為を実行するか否か迷っていることを表す。どんな行為を実行するかを問題にする(9)(10)のような「いかにせむ」との違いが注目される。

(15) つごもりにまた、「^(兼家)『これして』となむ」とて、はては文だにもなうてぞ下襲ある。いかにせましと思ひやすらひて、これかれ^(=侍女たち)に言ひ合はすれば、「なほ、このたびばかりころみにせよ。いと忌みたるやうにのみあれば」など、さだむることありて、(蜻蛉日記、319)

(16) さは^(=姫君ノ乳母ヲ引キ受ケルトハ)聞こえながら、^(宣旨ノ娘ハ)いかにせましと思ひ乱れけるを、いとかたじけなきによろづ思ひ慰めて、「ただのたまはせむままに」と聞こゆ。(源氏物語・濤標、②287)

(15)は、兼家から下襲の仕立てを頼まれた道綱母が侍女たちに相談する場面である。引用述語が「思ひやすらふ」であること、相談を受けた侍女が「せよ」と述べていることから、どんな行為を実行するかではなく、「下襲を仕立てるか否か」を問題にしていることが明らかである。(16)は、明石の姫君の乳母を一度は引き受けた宣旨の娘が下向を再考する場面である。表現上は具体的な行為が示されていないが、「乳母を引き受けて明石に行くか否か」を問題にしている。以上のように、「まし」が用いられた話し手の意志をめぐる疑問文は、行為の実行が決まっていないことが特徴である。

本節では、前項で明らかにした散文における話し手の意志をめぐる疑問文の様相を確認し、行為の実行が決定している場合には「む」が、行為の実行が未決定である場合には「まし」が用いられていることを示した。次節以降では、散文の様相を踏まえて、中古和歌における話し手の意志をめぐる疑問文について調査と考察を行なう。

3 調査資料

調査資料は、国立国語研究所『日本語歴史コーパス 平安時代編』所収の16作品(竹取物語・古今和歌集・伊勢物語・土佐日記・大和物語・平中物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・堤中納言物語・

更級日記・大鏡・讃岐典侍日記) および『日本語歴史コーパス 和歌集編』所収の後撰和歌集・拾遺和歌集である。

考察の対象は、和歌において文末に「む」または「まし」が用いられている一人称主語の疑問文のうち、「む」「まし」が話し手の意志を表し、話し手自身の意志的な行為に関する疑問文と解釈される例である⁽¹⁾。「まし」が用いられている疑問文の場合、事実と反する仮定条件節を伴うなど、明らかに反事実条件文(いわゆる反実仮想)と考えられる(17)のような例は除外した。

(17) ほのかにも軒端の萩を結ばずは露のかごとを何にかけまし

(源氏物語・夕顔、①191)

4 調査結果

調査資料における話し手の意志をめぐる疑問文の例数を表2に示す。併せて前稿の調査による散文における例数を表3に示す。

表2 和歌の用例数

	～まし	～む
肯否疑問文	28	20
補充疑問文	14	68
選択疑問文		4

表3 散文の用例数

	～まし	～む
肯否疑問文	47	
補充疑問文	28	86
選択疑問文		

前稿と同様に、疑問文を肯否疑問文・補充疑問文・選択疑問文の3種に分類した。以下に、各タイプの話し手の意志をめぐる疑問文の例を挙げる。

(18) 松虫の声する方に宿やからまし (古今和歌集201、肯否疑問文)

(19) いづくにか身をば棄てむ (源氏物語・浮舟、⑥192、補充疑問文)

(20) ひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ

(古今和歌集1、選択疑問文)

肯否疑問文は肯定あるいは否定によって解消される疑問文、補充疑問文は疑問の標識となる不定語に具体的内容を補充することで解消される疑問文である。また、選択疑問文は、肯否疑問文相当の形式が選択肢として複数並置され、そのいずれかを選択することで解消される疑問文である(藤原慧悟2023)。

肯否疑問文と選択疑問文に「む」が用いられた例が見られることが、散文と異なる和歌の特徴として指摘できる。以下では、疑問文のタイプごとに節を分けて考察する。ただし、補充疑問文は「いかにせむ」「いかにせまし」の類とそれ以外とに節を分けて論じる。

5 考察

5.1 話し手の意志をめぐる肯否疑問文

話し手の意志をめぐる疑問文としての「～や～まし」は、散文の場合と同じく、ある行為を実行するか否かを迷っていることを表す。

(21) (明石の君→源氏)年へつる苦屋も荒れてうき波のかへるかたにや身をたぐへまし
(源氏物語・明石、②267)

(22) 秋の野に道も迷ひぬ松虫の声する方に宿やからまし (古今和歌集201)
(21) は明石を去る源氏に向けて明石の君が詠んだ歌で、「波に身を任せるか否か (=身投げするか否か)」を問題にする表現である。(22) には詞書がないが、「松虫の声がする方向で宿を借りるか否か」を問題にしていると解釈できる。

一方、散文には見られなかった「～や～む」は、行為の実行がほとんど決定しているように解釈できる。

(23) (薫→大君)つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらむ
(源氏物語・椎本、⑤209)

(24) ふみわけてさらにやとはむもみち葉のふりかくしてし道と見ながら
(古今和歌集288)

(23) は、薫が大君に向けて、匂宮を案内するついでに先に契りを交わしたいと述べた歌で、行為の実行がほとんど決定していると解釈することが可能である。

(24) は「秋はきぬ紅葉は屋戸にふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし」(古今和歌集287)を踏まえて、「訪ねる人はいない」に対して「私が宿を訪ねよう」と述べたものである。それぞれ、「渡るか否か迷っている」「訪ねるか否か迷っている」というよりも、「渡るとするか」「訪ねるとするか」くらしい意と解釈するのが適当である。

(23) (24) のような話し手の意志をめぐる疑問文としての「～や～む」は、散文には見られなかった。行為の実行がほとんど決定しているなら平叙文を用いて「～む」と表現すればよく、「～や～む」が和歌で用いられているのは音数律が影響していると思われる。「～む」の方が自然で、散文には用いられないが、音数律を守るためなら許容できる表現だったのだろう。

中古語における話し手の意志をめぐる肯否疑問文の調査は、林淳子 (2016) も行っていて、現代語における意志をめぐる肯否疑問文が持つ表現機能の広がりにも注目した現古対照を目的として、『日本語歴史コーパス 平安時代編』を用いている。中古語における文型間の意味の違いを論じる本稿とは目的が異なるが、重要な先行研究であるため、林氏の調査による「～や～む」「～や～まし」の表現機能と例数を図 1 として引用する。なお、林氏は散文と和歌とを区別していない。

主語	表現機能		～や…ム	～や…マシ
1 人称	非対人的	躊躇感の表出	5	49
		未決定の意志の表出	6	1
	対人的	意志表明	4	1
		相談	2	0
		申し出	0	2
合計			17	53

図1 「～や…ム」「～や…マシ」の表現機能別例数(林淳子2016の表3による)

図1は、行為の実行が決定しているか否かによって「む」と「まし」とが使い分けられるという本稿の主張と矛盾する例の存在を示している。具体的には、「躊躇感の表出」「相談」の「～や～む」、「未決定の意志の表出」「意志表明」の「～や～まし」である。そこで、林氏が実例として挙げている例の検討を行なう。

まず、「～や～む」のうち、5例ある「躊躇感の表出」の例として示されている(25)である。肯否疑問文の例とされているが、本稿はこれを選択疑問文に分類する。

(25) 世の中にいづらわが身のありてなしあはれとや言はむあな憂とや言はむ
(古今和歌集943)

(25)は、「「あはれ」と言うか否か」「あな憂」と言うか否か」という二つの肯否疑問文が単純に並置されているのではなく、「あはれ」と言おうか、それとも「あな憂」と言おうか」という択一的な疑問表現である。ある行為をするか否か迷っていることを表現していないため「躊躇感の表出」を表す肯否疑問文とは考えない。林(2016)には挙げられていないが、類例として(26)を指摘できる。

(26) 年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ
(古今和歌集1)

計4例の「躊躇感の表出」として数えられているであろう(25)と(26)を2例の選択疑問文として数えなおすと、「～や～む」の「躊躇感の表出」は1例のみになる。残る1例は特定できないが、(27)の「我やゆかむ」がそれではないかと思われる。

(27) 君や来む我やゆかむのいさよひに槇の板戸もささず寝にけり
(古今和歌集690)

(27)も選択疑問文だが、並置された「君や来む」が非一人称主語であるため、話し手の意志をめぐる疑問文とはせずに考察の対象から除いた⁽³⁾。

次に、「相談」の「～や～む」として示されている(28)である。本稿は(28)も、(25)と同様の理由で選択疑問文に分類する。

(28) 女、「いづちぞ」といひおこせたりければ、「紅葉濃き山へなむ」とて、

散るをまたこきや散らさむ袖ひろげひろひやとめむ山の紅葉を
「いかがはせむ。のたまはせむにしたがはむ」といへば、

(平中物語、512)

(28) は 2 例の「相談」の「～や～む」として数えられているはずだから、選択疑問文として数えなおせば「相談」の例はなくなる。これらの例については 5.2 節で論じる。

さて、「躊躇感の表出」「相談」の「～や～む」の存在は「む」が行為の実行が決定している場合に用いられるという本稿の指摘と矛盾するが、選択疑問文として数えなおすことができ、複数の表現機能に散在していた「～や～む」は「未決定の意志の表出」と「意志表明」に限られると捉えることができる。「未決定の意志の表出」と「意志表明」に共通するのは、話し手の迷いがほぼ感じられないことである。林氏は、現代語におけるの例として (29) を、「意志表明」の例として (30) を示している。

(29) (独り言)「よし、自分の仕事は終わったから、山田を手伝おうか」

(林 2016、「未決定の意志の表出」)

(30) 「おいしそうなお菓子だな。私もひとつもらおうか」

(林 2016、「意志表明」)

(29) を手伝うために席を立つのと同時に発話することも、(30) を菓子に手を伸ばすのと同時に発話することも可能で、対人性の違いはあるが、どちらも話し手にとって行為の実行がほとんど決定している。表現機能が「未決定の意志の表出」と「意志表明」とに限定される「～や～む」は、行為の実行がほとんど決定している場合に用いられる表現であると言える。

一方の「～や～まし」は、林氏の調査でも「躊躇感の表出」に偏っている。「躊躇」とはある行為を実行するか否か迷うことであるから、「～や～まし」は行為の実行が未決定の場合に用いられる表現であると言える。しかし、図 1 にはわずかながら「躊躇感の表出」以外の例が見られるため、検討を加える。「未決定の意志の表出」とされているのは (31) である。

(31) ともかくも御覽ずる世にや思ひ定めましと思しよるには、やがてそのついでのままに、この中納言(=兼)より外に、よろしかるべき人、また、なかりけり。
(源氏物語・宿木、⑤377)

(31) は帝が女二の宮の縁組について思案する場面で、『新編日本古典文学全集』の頭注には「自分が帝位にある間に。女三の宮の前例を根拠に、女二の宮の降嫁を決意。」とある。しかし、「思ひよる」「思しよる」は、(32) のように「思い付く」「考えが及ぶ」くらいの意であり、(31) は必ずしも「決意」の表現とは言えない。

(32) (柏木カ)若君の御事をさぞと(=自分ノ子ゲト)思ひたりしも、げにかかるべき契りにてや思ひの外に心憂きこともありけむと思しよるに、(女三ノ宮ハ)さま

ざまもの心細うてうち泣かれたまひぬ。 (源氏物語・柏木、④319)

(32) は「こうなるはずの宿世が原因で、思いがけなくもつらいことがあったのだろうか」の意である。また、(31) と同じく「思しよる」で引用されている (33) の「～や～まし」は、林氏の調査でも「躊躇感の表出」に分類されている。

(33) 内大臣にも、やがてこのついでにや知らせたてまつりてましと思しよれば、いとめでたうところせきまでなむ。 (源氏物語・行幸、③295)

以上を踏まえて、「未決定の意志の表出」とされている (31) も、傾向に照らして「躊躇感の表出」と解釈するのが適当と思われる。また、「意志表明」の例とされている (34) は、小松登美 (1980: 232) が「難解の歌として知られ、諸説ある」と述べており、「意志表明」の確実な例とは言えない⁽³⁾。

(34) 折すぎてさてもこそやめさみだれて今宵あやめの根をやかけまし
(和泉式部日記、26)

(34) も、傾向に照らして「今夜あやめの根を (服に) かける」という行為を実行するか否か迷っていることを表現していると考えたい。なお、「申し出」は自身の行為の実行を聞き手に委ねるということであるから、行為の実行が未決定であると覚えてよい。

「まし」が行為の実行が決定している場合に用いられるという本稿の指摘と矛盾する「未決定の意志の表出」「意志表明」の「～や～まし」は、確実な例ではないことを指摘した。

以上、本節では中古和歌における話し手の意志をめぐる肯否疑問文について論じて、「～や～む」は行為の実行がほとんど決定している場合に用いられること、「～や～まし」は行為の実行が未決定の場合に用いられることを確認した。話し手の意志をめぐる疑問文としての「～や～む」は散文には見られない表現で、和歌で用いられるのは音数律の影響であると考えた。しかし、「む」は行為の実行が決定している場合に、「まし」は行為の実行が未決定の場合に用いられるという散文における使い分けは、和歌の様相とおおむね重なっている。

5.2 話し手の意志をめぐる選択疑問文

次に、話し手の意志をめぐる選択疑問文について検討する。いずれの例も「む」が用いられて、「まし」が用いられた例は見られなかった。(35) ～ (37) は、どれも「言ふ」という行為をどのように実行するかを問題にしている。

(35) 年のうちに春は来にけり ひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ
(古今和歌集 1)

(36) 世の中にいづらわが身のありてなし あはれとや言はむあな憂とや言はむ
(古今和歌集 943)

(37) 昼なれや見ぞまがへつる 月影を今日とやいはむ昨日とやいはむ
(後撰和歌集 1100)

いずれの例も、どちらかの言い方で「言ふ」という行為を実行することが決定している。(35)～(37)は「何とか言はむ」のような補充疑問文に対する回答案を選択肢として示したもので、5.3節で扱う、実行が決定している行為をどのように実行するかを問題にする「不定語～む」にほぼ相当すると言える。

(38)は、どちらの行為を実行するかを問題にしている。

(38) 散るをまたこきや散らさむ袖ひろげひろひやとめむ山の紅葉を

(平中物語、512)

(35)～(37)の「～とや言はむ～とや言はむ」とは違って並列された選択肢の述語が異なるが、散っている山の紅葉に対してどちらかの行為を実行することを前提にしている、やはり何らかの行為の実行が決定している。(38)は具体的な回答案が選択肢として表現されているが、5.4節で扱う、どんな行為を実行するかを問題にする「いかにせむ」にほぼ相当すると言える。

話し手の意志をめぐる選択疑問文は散文には用例が見られなかった。しかし、同じく散文に用例の見られない肯否疑問文の「～や～む」が平叙文の「～む」に近いのに対して、選択疑問文は補充疑問文に近かった。ほぼ同意の表現である「不定語～む」や「いかにせむ」は散文にも見られること、和歌でも用例数が少ないことから、散文に話し手の意志をめぐる選択疑問文の用例が見られないのは偶然であると考えられる。

本節では中古和歌における話し手の意志をめぐる選択否疑問文について論じて、すべての例で文末に「む」が用いられ、何らかの行為の実行が決定していると解釈されることを確認した。話し手の意志をめぐる選択疑問文は和歌にしか見られず、その用例数も決して多くはないが、行為の実行が決定している場合に「む」が用いられるという話し手の意志をめぐる疑問文全体の様相の中に位置づけることができる。

5.3 話し手の意志をめぐる補充疑問文1——「不定語～む」「不定語～まし」——

本節では話し手の意志をめぐる補充疑問文について論じる。ただし、「いかにせむ」「いかにせまし」の類は次節で扱う。他の「不定語～む」「不定語～まし」とは異なる表現性を持っているからである。

散文における「不定語～む」は実行が決定している行為をどのように実行するか、「不定語～まし」は実行が未決定の行為をどのように実行するかを問題にする表現であった。和歌には前後文脈がないことも多く、解釈の決定は難しいが、散文の様相に照らして和歌の用例を解釈しても問題がないことを示す。

(39) 泣き侘びぬいづちかゆかむほととぎすなほ卯の花のかげははなれじ

(後撰和歌集156)

(40) いまはわれいづちゆかまし山にても世の憂きことはなほも絶えぬか

(大和物語、272)

散文の例に鑑みると、(39)は「どこかに行くつもりだが、どこに行こうか」という表現、(40)は「どこかに行くとしたら、どこに行こうか」という表現ということになる。なお、(39)は『新日本古典文学大系』が「ほととぎすのことを言っているかに見えるが、作者自身のことが中心になっている」と付注していて、本稿も話し手の意志をめぐる疑問文と解釈した。

(41) 明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ

(源氏物語・明石、②257)

(42) 雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

(古今和歌集337)

(41)は、源氏の「むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと」を受けた明石の君の歌である。会話するように要求されているから、「語ろうと思うが、どれを夢だと区別して語ったらよいか分からない」と述べる表現で、行為の実行が決定していると解釈される。(42)は雪が降ったのを見て詠んだ歌で、「もし折るとしても、どれを梅だと区別して折ったらよいか分からない」という表現である。雪と梅の区別がつかないという歌であるから、本当に梅の枝を折ろうとしているという解釈は不適当である。(41)とは異なり、行為の実行は未決定の段階である。

本節では、和歌における「不定語～む」「不定語～まし」を、散文のそれと同じように解釈しても問題がないことを確認した。「いかにせむ」「いかにせまし」の類については節を改めて論じる。

5.4 話し手の意志をめぐる補充疑問文2——「いかにせむ」「いかにせまし」——

本節では、話し手の意志をめぐる補充疑問文のうち、「いかにせむ」「いかにせまし」の類について論じる。散文の「いかにせむ」はどんな行為を実行するかを問題にする表現、「いかにせまし」は行為を実行するか否かを問題にする表現であった。和歌においても「いかにせむ」の類はどんな行為を実行するかを問題にしていると解釈できる。

(43) いかにせむ小倉の山のほととぎすおぼつかなしと音をのみぞなく

(後撰和歌集196)

(44) 日にそへてうさのみまさる世の中に心つくしの身をいかにせむ

(落窪物語、18)

(43)は、(39)と同様にほととぎすに自身を重ねた歌である。「おぼつかなし」という表現から当惑の心情を読み取ることができて、どんな行為を実行するかを問題にしていると考えられる。(44)も、「心つくし」という表現から、どんな行為を実行するかを問題にしていると考えられる。

「いかにせまし」の類は2例しか見られない。

(45) 男、「……京にのぼり、宮仕へをもせよ。……」など泣く泣くいひ契りて、

たよりの人にいひつきて、女は京に來にけり。……。風など吹けるに、かの津の國を思ひやりて、「いかであらむ」など、悲しくてよみける。

ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の荻ぞ答ふる

となむひとりごちける。さて、とかう女さすらへて、ある人のやむごとなき所に宮たてたり。

(大和物語、376)

(45) は、生活を立て直してから再会することを男と約束し、津の國から京に來た女が詠んだ歌である。(46) (47) のように「同意・肯定の気持ちの時に発する語」(小田勝2021: 183) で、「そよ」と回答されていることから、(45) の「いかにせまし」はどんな行為を実行するかを問題にしているとは考えられない。

(46) …ましてや秋の風吹けば籬の荻のなかなかそよとこたへむ…

(蜻蛉日記、180)

(47) 思ふこと籠めては苦し花薄穂に出でて言はむそよと答えよ

(万代和歌集、『新編国歌大観』)

男と別れる際に京で宮仕えをするように言われていること、実際に歌を詠んだ後で宮仕えをしていることから、(45) は男の言葉通りに宮仕えするか否かを問題にしていると解釈するのが適当である。

もう 1 例の (48) は題知らずの歌である。

(48) 穂には出でぬいかにせまし花薄身を秋風に捨てや果ててむ

(後撰和歌集267)

第四・五句の「身を秋風に捨てや果ててむ」は、身を捨てることを決定しつつあることを表す肯否疑問文と考えられる。第二句の「いかにせまし」は、身を捨てることを決定する前の、身を捨てるか否か迷っている段階を表すと解釈すれば散文における用法と一致する。本稿の理解では、(48) の一首全体は、「(恋心が薄の穂のように) 表に出てしまった。どうしたものだろうか (=身を捨てたものか否か)。やはり (花薄のように) 身を秋風にすっかり捨ててしまうとするか」の意である。行為の実行が未決定の段階からほとんど決定している段階へと、話し手の意志が行為の実行に向けて形成される段階を表現したものと解釈される。

本節では、和歌における「いかにせむ」「いかにせまし」を、散文のそれと同じように解釈しても問題がないことを確認した。

6 本稿の結論

本稿では、中古散文の様相に照らして、中古和歌における話し手の意志をめぐる疑問文について調査・考察を行なった。その結果、文末に「む」が用いられた場合と「まし」が用いられた場合との違いについて、以下のことを明らかにした。

I 何らかの行為の実行が決定している場合、あるいは、行為の実行がほとんど決定している場合には、「む」が用いられる。

- I A 話し手の意志をめぐる肯否疑問文「～や～む」は、行為の実行をほとんど決定しつつあることを表す。
- I B 話し手の意志をめぐる選択疑問文「～や～む、～や～む」は、実行が決定している行為をどのように実行するか迷っていること、あるいは、何らかの行為の実行を前提としてどんな行為を実行するか迷っていることを表す。
- I C 話し手の意志をめぐる補充疑問文「不定語～む」は、実行が決定している行為をどのように実行するか迷っていることを表す。
- I D 話し手の意志をめぐる補充疑問文「いかにせむ」は、何らかの行為の実行を前提としてどんな行為を実行するか迷っていることを表す。
- II 何らかの行為の実行が決定していない場合には、「まし」が用いられる。
- II A 話し手の意志をめぐる肯否疑問文「～や～まし」は、行為を実行するか否か迷っていることを表す。
- II B 話し手の意志をめぐる補充疑問文「不定語～まし」は、実行が決定していない行為をどのように実行するか迷っていることを表す。
- II C 話し手の意志をめぐる補充疑問文「いかにせまし」は、行為を実行するか否か迷っていることを表す。

和歌には、散文に見られない表現（＝ I A・I B）が存する。話し手の意志をめぐる肯否疑問文「～や～む」（＝ I A）が和歌で用いられるのは音数律の影響、話し手の意志をめぐる選択疑問文「～や～む、～や～む」（＝ I B）が散文に見られないのは偶然であると考えられる。しかし、話し手の意志をめぐる疑問文に「む」が用いられた場合（＝ I）と「まし」が用いられた場合（＝ II）との違いは散文とおおむね共通していて、中古和文全体に適用できるものである。

注

- (1) 「～むや」は、基本的には聞き手の意志を問う疑問文であり（岡崎正継1996：第三章）、形式上対応する「～ましや」は反語に傾いて対応が見られない。また、林淳子（2016）によると「未決定の意志の表出」「意志表明」の例があるが、可能の意を含む推量表現として解釈することができることから、本稿では「～むや」を扱わない。なお、仮に「～むや」が「未決定の意志の表出」「意志表明」を表すとしても、行為の実行が決定している場合に「む」が用いられるという前稿および本稿の結論とは矛盾しない。
- (2) 林淳子（2016）は、「未決定の意志の表出」の「～や～む」として散文の例を示している。
 ・明けぬれば、（北ノ方ハ）わたらむのいそぎしたまふ。すくよかなる衣のなきぞいとほしき。「隠しの方にやあらむ」とのたまふ。 （落窪物語、324）
 たしかに、話し手である北の方を主語として「屏風の後ろにしようか」の意と解釈することもできる。しかし、「すくよかなる衣」を主語として「着古していない衣が納戸にあるだろうか」の意とも解釈することができる（柿本奨1991）。北の方が客人として招かれているという文脈からも後者の解釈が相応しく、本稿では上の例を話し手の意志をめぐる疑問文とは考えない。

- (3) (27) は「あなたが訪れるのを待とうか、それとも私が強く想って夢で逢いに行こうか」という意図の表現であるから、どんな行為を実行するかを問題にする話し手の意志をめぐる選択疑問文と考えても本稿の結論と矛盾しない。
- (4) 林淳子 (2020: 184) では「亡き宮様を偲ぶ涙で袖を濡らしに出かけましょう」という『新編日本古典文学全集』の現代語訳が引用されているが、小松登美 (1980: 232) は「今夜、あやめの根を袖につけ(て五日の気分を楽しみ)ましようかしら。一わたし、いっそ情熱に身をまかせて、今夜、あなたと二人で寝……とでも言ってみようかしら」と現代語訳している。小松氏の解釈の可否はともかく、「意志表明」以外の解釈も可能ではある。
- (5) 前稿の調査範囲外に次の例がある。『新日本古典文学大系』は「おそらく夫が遠国の国守に任じられ、共に句だろうか下るまいか迷っていたのであろう」と付注し、話し手の意志をめぐる選択疑問文と解釈している。
- ・はるかなる所に、行きやせむ行かずやと、思ひわづらふ人の、山里よりもみちを折りておこせたる
(紫式部集 8・詞書、『新日本古典文学大系24』、327)
- しかし、「思ひわづらふ」は次例のように「心配する」の意でも使われる。
- ・(入道ハ) (姫君ノ) 母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず、(源氏物語・明石、②255)
- そのため、「『(アノ人ハ) 遠いところに行くだろうか、それとも行かないだろうか』と(私=紫式部ガ) 心配している人」の意、すなわち推量の選択疑問文とも解釈できる。

使用テキスト

国立国語研究所 (2016) 『日本語歴史コーパス 平安時代編』(ver1.1) および同 (2019) 『日本語歴史コーパス 和歌集編』(ver.1.0) による。出典には『新編日本古典文学全集』のページ数(勅撰和歌集の用例には『新編国歌大観』の歌番号)を示した。上記以外のテキストによる場合は、個別に出典を断った。引用にあたって表記を改めた部分がある。

参考文献

- 岡崎正継 (1996) 『国語助詞論攷』おうふう
- 小田勝 (2021) 『百人一首で文法談義』和泉書院
- 柿本奨 (1991) 『落窪物語注釈』笠間書院
- 小松登美 (1980) 『和泉式部日記 (上) 全訳注』講談社学術文庫
- 林淳子 (2016) 「意志をめぐるYes/No疑問文の表現機能：現代語と中古語の比較を通して」『日本語文法』16- 1
- 林淳子 (2020) 『現代日本語疑問文の研究』くろしお出版
- 藤原慧悟 (2022) 「中古和文における話し手の意志をめぐる疑問文について」『日本語の研究』18- 3
- 藤原慧悟 (2023) 「中古和文における選択疑問文について」『国語研究』86

【付記】本稿は、令和4年度國學院大學國語研究会前期大会での研究発表の内容を加筆・修正したものです。席上、その他で多くのご意見・ご指導を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。